

教育新聞

週2回 月・木発行
発行所 教育新聞社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-40
代表 ☎ 03(3295)7051
[購読申し込み・お問い合わせ]
http://www.kyobun.co.jp/
[購読料・月額] 2,500円+税
©教育新聞社 2014

広島県福山市を流れる芦田川の中州から、一對の不思議な板ぎれが出土した。学者たちは頭をひねったが、やがて履物の板金剛であったことが分かった。人々の履物は季節や天候、あるいは状況や身分によって異なる。鎌倉時代後期に描かれた一遍聖絵では、様々な場面で見ることが出来る。

第2回

子どもの多様な見方を生かす社会科授業

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師 多賀 譲治

「先生、地頭は何を履いているの？」。地頭の役割を話していると、一人の子供が投げかけた疑問だ。「地頭…履物？はて？」。一遍聖絵に私を結びつけた一言だった。

上は貴人から下は乞食まで、聖絵には実に多くの人物が描かれている。私は片端からルーペで人々の足を調べた。右の足駄(あしだ)下駄を脱いだ男が左足の甲を掻いている。四つん這いの乞食は手にも足駄をつけている。走っている武士は片方の草履が脱げている。この時代の絵や彫刻は実に写実的だ。

「地頭は何を履いているの？」

やがて、あるものに目がいった。縦に一本の線が描かれている草履だ。それは剃髪する女性の家の縁石にチョコンと揃えて置かれていた。当初はただの草履と見過ごしていたのだが、いくつも見ているうちに、線のあるものと、そうでないものがあることに気がついた。そこで、文献を調べて板金剛の存在に突きあたったのである。

板金剛は、藁や草で2枚の板を編み込んだ草履だ。別名、板草履ともいう。可動式の板が入っていることにより、小石や凸凹に対応する優れた履物といえる。似たようなものを興福寺の阿修羅さんが履いているので、その歴史は古い。構造上大きな編み目が縦に1本入るが、聖絵の作者はそれを忠実に描き分けていたというところに

は足駄が多くなる。また、遠出の旅や活動的な場面では草鞋も多く見られる。わらべたちは裸足が多いが、庄屋クラスの主人も裸足で庭に降りている。地面が濡れていない時などは裸足も多かったのだらう。一遍さんもけっこう裸足が多い。驚くべきは雪道を裸足で同行する僧もいて、これはさすがに修

行だろうかと思ってしまう。農婦が談笑しながら歩いている。履いているのは草履か板金剛か？ 私ほこれを直接子どもたちに見せた。すると、「足が汚れそうなきは下駄」「遠出は草鞋」「普段履きは草履か板金剛」「裸足は身分差だけではない、状況によって誰でもなる」などに加え、「ガラスが落ちていないから」というかわいいたく大切な意見もでてきた。子どもの意識は地頭が何を履いていたかではなく、人々がどのようなときに何を履いていたかに関心した。

知識は忘れるが、ものを見る力は生涯身につく。まず先生が興味を持ち、楽しみながら教材研究を行うことだ。教科書や指導書に頼ってばかりでは、子どもたちはもちろん、自身のものを見る目も育たない。